

看護学生が障がいを持つ子どもと関係を築き、主体的に看護を行えるための 実習指導上の指針

吉田 幸代（応用看護学）

【キーワード】 小児看護学実習・指導過程・指導者の認識・障がい児・学生の変化

本研究の【研究目的】は、看護学生が障がいを持つ子どもと関係性を築き、主体的に看護を行えるための実習指導上の指針を得ることである。【研究対象】は小児看護学実習で障がいを持つ子どもを担当した学生への指導過程における指導者の認識である。【研究方法】実習指導場面から学生の認識および言動が変化・発展し、子どもの療育生活を整えることができたと思われる9事例23場面を研究素材とした。研究素材をプロセスレコードに再構成し、各場面における＜指導者が着目した学生の言動や状況＞を導き出した。次に＜指導者が着目した学生の言動や状況＞には指導者のどのような判断があったのかを指導者の認識と表現に着目し＜指導の意味＞を取り出し、学生に変化をもたらした＜指導者の認識の特徴＞を明らかにした。次に＜指導者が着目した学生の言動や状況＞の共通性と相異性から＜指導者が指導の必要性を捉えた学生の言動や状況の特徴＞13項目を抽出し、それらをもとに＜指導者の認識の特徴＞を類別し、その共通した特徴から看護学生が障がいを持つ子どもと関係性を築き、主体的に看護を行えるための指導内容を吟味し、実習指導上の指針を導き出した。以下、指導上の指針を示す。

1. 学生が子どもの反応を捉えられていないときには、子どもの反応に着目して、その反応の意味を考えられるように促す
2. 子どもへの関わりや技術に不安があるときには、子どもの快の反応を引き出せるモデルを示すことで、学生の意欲を引き出し、学生の子どもへの関心が高まった時を見極め指導する
3. 子どもの疾患や障がい描けていないときには、障がいによる不自由な状態を追体験できるよう促し、学生が子どもに必要な支援を考えられるように刺激する
4. 学生が子どものできることに気づけていない時には、子どもなりの頑張りに気づけるよう促し、心身の不自由さはあっても子どもの可能性を伸ばすことができるよう支援を学生と共に検討する
5. 学生が子どもと関わることに戸惑いがあるときには、何に戸惑いを感じているかを見極め、学生を整え子どもに目が向くように支援する
6. 子どもの生活が描けていないときには、親元から離れて過ごす子どもの24時間の生活を描き、子どもに合った関わりが見出せるように支援する
7. 学生と子どもの関係が築けていない時には、学生の関わりが子どもにとって快の体験となるよう学生と子どもの双方を整える
8. 学生が子どものやる気を引き出し、子どもに合った関わりを提案したときには、学生の思いを承認し、後押しする。